

『学校に「行かない」「行きたくない」「行きづらい」子どもたちがたくさんいます。家と学校以外に、安心して過ごせる居場所が必要です。「いどこスクール」は、自分で幸せをつかんで「いこうとする」ことを大切にしているフリースクールです。』

「もうひとつの学校」から「フリースクール」へ

2020年コロナ禍、3月2日からの一斉休校。「休校で困ったらtomosにおいて」と居場所を開くと、週末いどこ塾に来ていた子どもたちがtomosにやってきました。

学校が再開された6月。休校以前に学校に行っていた子は学校に戻りましたが、学校に行っていなかった子が居ました。その居場所として「いどこスクール」を始めました。

好奇心をエンジンに「自分の時間をデザインする」、無理矢理やらされる勉強で「学ぶことが嫌いにならない」、自由に「やってみたいことをやってみる」を大切にしてきました。

5年間の中で、新たに来た子、卒業して高校に進んだ子、学校に戻った子、来なくなった子、行きつ戻りつの子、たまに来る子、相談や見学に来る親子など、様々な子どもや保護者に出会ってきました。どの子にも、安心できる居場所が必要だと感じます。どの子の生命（いのち）も、その子として輝いてほしいと願います。

当初「もうひとつの学校」というネーミングは、「既存の学校とは異なる学校」のイメージでしたが、何やら漠然として一般的には分かりづらいものでした。今の実態にフィット感のある名称は「フリースクール」という認識に至り、変更することにしました。説明しやすく、多くの人に分かりやすくなると感じています。子どもたちと作った「フリースクール」看板は、ここが何をしているところなのかが一目で分かるものになっています。

「不登校」って何が問題なの？

2016年「義務教育の段階における普通教育に相当する機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）が成立しました（2017年施行）。法律の施行にともない、文部科学省が「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する基本指針」を策定しています。

その中身は、

・不登校かどうかにかかわらず、「全ての」児童生徒が豊かな学校生活を送ること、そして安心して教育を受けられるような学校環境を確保すること

・不登校をどの子どもにも起こり得るものとして捉え、不登校が問題行動であると受け取られないよう配慮すること

・不登校の子どもの支援に際して、登校という結果のみを目標にするのではなく、子どもが自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを重視し、「個々の不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援が行われるようにすること」

が理念として挙げられています。しかしながら、多くの人が知りません。

2023年度、小中学生の「不登校」数は、346,482人（前年度299,048人）。少子化が著しく進む一方、その数は年々増加しています。

「不登校」は、学校に行かないこと自体が問題ではありません。言うまでもなく問題行動ではありません。

本当の問題は、

①学校が合わないと感じた時、行くか？行かないか？の二者択一以外に「選択肢」があまりに少なく、自分に合う学びの場と出会えても経済的負担がかかる

②「学校に行くのが当たり前」「普通は、行くでしょ」という社会通念が、不登校児童生徒や保護者を苦しめ、学校に通う中にもしんどい思いをする子がいる

③子どもが学校に「不適應」を起こしているのではなく、長年続た既存の学校システムが子どもたちに合わなくなっている

ことです。

大切にしたいこと

5年間の「いどこスクール」の活動を通して、子どもたちはここでの「安心」をベースに新しいことにチャレンジするチカラを蓄えてきました。通い続けている子にとって「ここは自分たちの居場所だ」という感覚が確かにあると感じます。時々来る子にとっても、何かに困った時「行ってみたいくなるトコロ」になっています。引き続き「安心なベース」づくりと、安心を基に新たなチャレンジができるスクールを子どもたちと共に創っていきます。

学校に行かない選択をした子どもたちの存在は、「そもそも教育は何のためにあるのか？」「学ぶとは、どういうことか？」「学びの主体は、誰にあるのか？」・・・を投げかけています。「不登校」を、子どもが悪い、親が悪い、学校が悪い、先生が悪い・・・と捉えず、「不登校」を通して、「すべての子どもが安心して教育を受けられるために」大切なことは何か、「どうすれば、その選択に「不利益」（経済的・精神的）を被らず、すべての子どもが自分に合う教育を選ぶことができるか」を考えていきます。

《 2024年度 総括報告 》

1. コンセプト：「ともにつくる」

スクールに関することを、大人が「勝手に決めて」子どもたちに伝えるのではなく、共に考えて決めていきます。「自分で考えて、自分で決める」ことが「幸せをつかんでいく」ことに繋がっていると考えているからです。

例えば、

自分たちが、自由に使えるお金って必要か？必要としたらいくら必要か？それは、どうしたら得られるのか？から、やりたいことをどうやって叶えるのか？どうやって必要な備品を買うのか？どこに設置するのか？など

<なんで、そう思うのか？>

tomosが新しくなった際、子どもたちには「いどこスクールが自由に使える部屋がある」と伝えていました。しかし、後から「このtomosは放課後事業のためのもの」と部屋の使い方について以前とは違うことを伝えました。自由に使うことが叶わないとわかった時、ある子どもから「結局、大人が勝手に決めるんやろ」と言われ、別の子どもからも「ちゃんと大人同士で話し合っただめておいて」と指摘されました。

この経験を通して、「子どもたちとは、一緒に過ごす一人の人として、しっかり話し合いながら決めていきたい」と強く思うようになりました。子どもたちの考えや気持ちを聞かずに、大人が一方向的に決めるのではなく、対等な立場で話し合うことが大切だと感じています。なぜなら、目の前にいる子どもたちは、自分たちのことをしっかり考えられる存在だからです。そして、スクールスタッフは自分たちが過ごす場所について、自分たちで考え、決めていきたいと思っているからです。

2. 24年度方針とその報告

①子どもたちの興味やしたいことに向けて、計画し実行していきます。

(そこに幸せを掴んでいくための学びがあると考えから)

「自分で考えて、自分で決める」

子どもたちが自分の幸せを自分で掴んでいくには、まず「自分で考え、決める」経験が大切だと考えています。

子どもたちが「やりたい！」と思ったことをどうすれば実現できるのか、一緒に考え取り組んできました。さまざまなイベントを子どもたちと計画・実行しました。

例えば、

- ・もらったチケットでサーカスを観に行く
- ・ポケモンセンターに行ってみる
- ・大学の教室で大画面を使ってスマブラをする
- ・奈良公園に行ってお鹿と触れ合う
- ・あたく（24年度10月で現場を離れるスタッフ）の壮行会を開く
- ・クリスマスパーティや誕生日パーティをする

など、子どもたち自身の「やりたい！」を形にしてきました。

その過程では、「やったことがない」「どうすればいいんだろう?」「できるかな…」という気持ちとのバランスを見ながら、それぞれに合ったサポートを模索してきました。大切なのは、やりたい気持ちがしぼんで「もうやらない」「やっぱりいいや…」と諦めてしまわないこと。そして、おとなが手を出しすぎて「結局、おとながやってくれるからいいや」という学びになってしまわないことです。

子どもたちが自分で考えて、自分で決めることを積み重ねることで、「自分の力でできた!」という実感を育んできました。

②相手の気持ちが動いていると見えたときに、何が起きているのか?どうしてそう思うのか?を聞きます。

(今この瞬間溢れ出したエネルギーの源が何か?に関心を持ち、本人に問うていく中で自己対話に繋がっていくと思うから)

「本人にきく」

私たちは、子どもたちの言動の背景にある気持ちや考えに触れるため、問いかけを大切にしてきました。日々の生活の中で気になることがあれば、その瞬間や振り返りの時間に本人に訊い(尋ね)てみます。スタッフ同士の振り返りで気になったことがあれば、後日改めて子どもに聞くこともあります。

「どうしてそうしたの?」と問いかけることで、子どもたちが自分自身の気持ちや行動に意識を向けるきっかけになればと考えています。すぐに答えを出してほしいわけではありません。たとえその場では答えられなくても、問いかけられた経験が後に「なんでだろう?」と考えるきっかけになるかもしれません。

自分自身に問いを向けることができると、「どうしてそうしたのか?」を言葉で説明できるようになり、周りの人もその人の考えを理解しやすくなります。いどこスクールでは、子どもも大人も関係なく「なんで?」と問い合う文化が根付いてきたと感じています。

③保護者会を開催し、スタッフと保護者が話し合える・聴き合える場をつくります。

学期末に年3回、保護者会を開催しました。

保護者会を通して、保護者の話したい、聴いてほしい、聴きたいという感じが伝わってきました。家庭で見えている子どもの姿と、いどこスクールでの子どもの姿を、保護者とスタッフが共有する時間になりました。お互いの視点を聴き合うことで、子どもたちの成長や変化をより深く理解し合える機会になりました。

3. 現状、課題、解決策

現状：子どもたちにとって安心できる居場所になっている

いどこスクールは、子どもたちにとって「安心できる場所」として機能しています。ここを拠点に、小・中学校への通学に挑戦したり、学習に取り組む子がいます。卓球やバスケットボールなどのクラブ活動に参加する子もいれば、料理教室に通う子もいます。

「ちょっとやってみようかな」と思えたときに、いどこスクールがあることで新しいことにチャレンジできる。そんな場所になっています。それは、日々のやり取りを通じて安心できる居場所になっているからこそでしょう。

チャレンジの先で疲れたり、不安になったときには、いつでも戻ってこられる。安心できる場所と挑戦する場所を行き来しながら、たくましく成長していく子どもたちの姿に、私たちも勇気をもらっています。

いどこスクールは、子どもたちにとって大切な居場所です。それは「安心できる場所があるからこそ、新しいことにチャレンジできる」という考えのもと成り立っているからです。

課題①：通う子どもが減り、遊びの幅が狭まっている

子どもにとって遊びは、単なる娯楽ではなく、他者との関わりを学ぶ場でもあります。異なる個性を持つ人と遊ぶことで、新しい遊びが生まれ、視野が広がるきっかけになります。しかし、子どもが減ると、遊びの選択肢が限られ、こうした学びの機会が減ってしまいます。

以前は10人近くいたスクールのメンバーも、現在は3~4人に減っています。結果、次のような問題が生じています。

- 人数が少ないため、サッカーなどチームプレイの必要な遊びができない
- いつも同じメンバーで過ごすため、遊びが固定化され、新しい遊びを提案しづらくなる
- 既存の遊びに飽きてしまい、刺激が減る

(原因の一つ：フリースクールの広報不足)

フリースクール利用者が減っているひとつの要因は、「必要な人に情報が届いていない」と考えられます。

実際今年度、約10件の相談があり、その中には「学校でも家庭でもない第三の居場所が必要」と考える人もいました。不登校の子ども数は年々増えており、フリースクールの需要はあるはず。しかし、存在を知らないために、利用に結びついていない可能性があります。

課題②：関わる大人が固定化し、新しい刺激が減っている

子どもは、周囲の大人の影響を受けながら成長します。様々な大人と関わることで、これまで知らなかった価値観や考え方に触れる機会が生まれます。たとえば、ある大人が「サッカーやろう」と提案すると、新しい遊びが広がるかもしれません。また、「ボードゲームが好きなんだ」と話すと、子どもたちの興味関心が刺激されることもあります。

(問題点)

いどこスクールには、長年関わり続けている大人がいます。子どもにとって安心できる存在である一方で、以下のような影響が出ています。

- ・大人の興味や遊びの引き出しに限界があり、子どもたちにとって新鮮味がなくなっている
- ・積極的に子どもたちを遊びに巻き込んでいた大人も、関わる期間が長くなると、その姿勢が変化してくる

安心できる環境は大切ですが、適度な刺激や変化も必要です。子どもたちが新しい視点を持ち、成長していくには、異なる価値観や経験を持つ大人との関わりが重要です。

解決策①：ボランティアスタッフの導入

課題を解決するために、「新しい大人が関わる機会を増やす」のが有効だと考えています。たとえば、ボランティアスタッフを受け入れることで、次のようなことが考えられます。

- ・新しい大人の「好きなこと」や「得意なこと」を通じて、子どもたちの興味の幅が広がる
- ・新しい遊びや活動が生まれ、スクール内に新鮮な空気が流れる
- ・子どもたちがさまざまな価値観に触れ、考えを深める機会になる

新しい人が関わることで、子どもたちの心が動く瞬間が生まれるでしょう。そのとき、「何がそうさせたの？」と問いかけ、子どもたちと一緒に考えていきたいと思います。こうした変化を通じて、新しい学びや興味が生まれ、いどこスクールの環境がより豊かになることを期待しています。

解決策②：Instagramでの情報発信と「フリースクール」看板の設置

・いどこスクールのInstagramアカウントを開設し、日々の活動を発信しています。きっかけは、子どもたちから「スクールのメンバーが少なくてサッカーができない」という声が上がったことでした。そこで、まずは多くの人にスクールの存在を知ってもらうことが大切だと考え、Instagramを始めました。

投稿内容は、スクールの日常の様子や活動内容などです。子どもたち自身もInstagramに慣れており、写真加工やハッシュタグ選定など自分たちで工夫しながら投稿を行っています。

- ・いどこスクールの拠点である「tomos」に看板を設置しました。

これまで、地域に根ざした教育の拠点を目指して活動してきましたが、まだまだ認知が広がっていないように見えています。その要因を考えたとき、「そもそもtomosという建物が何なのか分からず、入りづらいのではないか」という仮説が浮かびました。

まずできることとして、建物の前に看板を設置しました。tomosの前には、大阪と奈良を結ぶ交通量の多い道路があるため、立地を活かして多くの人目に入りやすい場所に設置しています。また、「もうひとつの学校」「いどこスクール」という表現は、フリースクールを知らない人には伝わりづらい可能性があるため、より分かりやすい「フリースクール」という言葉を使いました。

4. 実績

開校日数112日・延べ人数479人・相談件数11件（2025/03/09時点）

家庭からの希望があれば、在籍校から出席認定がされています。これまでに交野市（旭小学校・私市小学校・第三中学校・第四中学校）、枚方市（津田南小学校・枚方中学校）、高槻市（安岡寺小学校）、茨木市（北陵中学校）から出席認定されています。

また、子どもたちの情報を共有することで在籍校と連携をしてきました。

《 2025年度 方針 》

好奇心を原動力に、拡がる世界へ誘（いざな）う

一人ひとりの「今」に寄り添い、個々のチャレンジを支援する。スクール生の内発的モチベーションが高まるような投げかけを行う。

私たちのスクールが大切にしていることを伝える工夫をし、「行ってみようかな」「相談してみようかな」と思われる存在になる。

①学校に行かない選択をした子どもたちにとって「安心な居場所」になる

②安心をベースに、子どもたちのチャレンジを支援する環境をつくる

→子どもたちの内発的モチベーションが沸き上がるような投げかけを行う

→その日に「やりたいこと」のみならず、中長期的に「やってみたいこと」を計画し実行してみる

③スクールの存在や大切にしていることを伝える工夫をし、未だ届いていない子どもたちや 保護者に知ってもらう

→安心して相談できる、見学や体験に来てみる人が増える

④定期的に保護者会を開き、子どもたちの今とこれからを共に考えていく

→保護者の声をスクール運営に反映し、「共につくる」を更に進めていく

⑤多様な大人に関わってもらえるよう、ボランティア等の募集を行う

→大学と連携する。activoやインスタを活用する。看板を出す・・・

⑥フリースクールに通う子どもたちの当該学校との連携をより深める

→出席日の報告に留まらず、子どもをまん中に、学校・保護者・スクール三者の連携を進める

⑦他のフリースクール等とのネットワークを広げる

→不登校や教育の現状と課題を知るために、様々な学習会や連絡会に参加する

→「不登校」の課題を根本的に解決するためのアクションにつなげる